
塔の上には

麗雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

塔の上には

【Nコード】

N8819Y

【作者名】

麗雨

【あらすじ】

「カランカランカラカラン……」

ある王子が森を散歩していると、どこからか不思議な音が聞こえてくる。音のするほうへ駆けてゆくと、そこには、まぶしいほどに白く輝く、巨大な「塔」があった。王子は塔の入り口を見つけ、塔を上っていった……

はたして、塔の上には何があるのか？

童話のようだけれど、実は怖い話なのです

白い塔

ある王子が、森へ散歩に来ていた。空は青く澄み、爽やかな風が吹いている。絶好の散歩日和である。王子はあごまである亜麻色の髪を風になびかせ、愛馬のクレロデンドルムに乗り、森を駆け回るのであった。

「カランカランカラカラン…」

王子が森の奥のほうまで来たとき、何か音がした。堅くて軽い石か何かが、お互いにぶつかり合っているような音である。王子は好奇心をそそられ、音のするほうへ馬を走らせた。

30mほどもある巨大なブナの間を駆けて行くと、ぽつかりと広場のようになっている空間に着いた。王子はそこで馬を止めた。――塔があつたのである。20mもあるうか。白い、レンガ造りであった。日の光を反射し、まぶしいほどに輝いている。

「カランカランカラカラン…」

また、音が鳴った。その、白い塔からである。どうやら、風が吹くとその塔のどこからか、あの乾いた音が響いてくるようであった。

王子は、塔に近付いていった。髪長姫を思い出していた。昔聞いた噂では、その姫は高い塔の上に魔女に閉じ込められており、いつも美しい声で歌を歌っているとのことだ。そして魔女が声をかけると、編んだ、長く美しい髪を垂らし、それに魔女をつかまらせて塔の上に引き上げるといふ。もしかしたら、そんな姫がこの塔の上にもいるのかもしれない。王子は胸に期待を抱き、塔を見上げた。誰かがいる様子はない。歌も聞こえないし、もちろん髪も垂れてこない。王子は少しがっかりしながらも、塔に向かって叫んでみた。

「誰か、いるのですか」

何も返事は無い。

「カランカランカラカラン…」

また、音が鳴る。聞けば聞くほど、寂しげな音だった。王子は、もしかすると風のせいではなく、誰かが鳴らしているのかもしれないと思い、もう一度、叫んだ。

「誰か、いるのですか」

王子のよく通る声が、虚しく辺りに響く。

「……………」

何かが聞こえた。高く、小さなか細い音。鳥のさえずりかもしれないかった。だが、王子は何故だか自分がよばれている気がしてならなかった。

「カランカランカラカラン……」

寂しげにあの音が響く。王子はクレロデンドルムから降り、塔の周りを回ってみた。すると塔の裏に、木でつくられた扉がある。

王子は、その扉の取っ手にそつと手をかけた。

「キイー……」

軋んだ音をたてて、扉が開いた。

扉の向こう

コツ…コツ…コツ……

王子は塔を上っていた。扉の向こうには、どこまでも続きそうな螺旋階段があつた。塔の外壁と同じ、白いレンガでできている。それどころか、塔の内壁も、階段の楯も全て、白いレンガで出来ていた。

「カランカランカラカラン…」

時折、音がする。塔の小窓——というよりは穴のようだったが——から風が入ったとき、その音は聞こえた。やはり、風が鳴らしていたようだ。しかし王子は、この塔の上に自分を呼ぶ何か——それが確かにあることを感じていた。その思いは、一歩一歩階段を上るほどに、確信に近づいてゆく。なぜだか分からないが、あの音が、塔が、白いレンガが、王子に訴えかけているようであった。

扉の向こう（後書き）

だ：誰か感想ください！

最上階

どれくらい、上っただろうか。王子は、螺旋階段を上りつめ、ついに最上階と思われる部屋の前まで来ていた。——正しくは、“部屋の下”だ。

螺旋階段の最後は天井に伸び、小さな扉に繋がっていたのである。

王子は、その扉を上を押した。ズ…ズズ…と重い音がし、扉が開いた。王子はそれを横にずらし、己の体を滑り込ませる。

——部屋であつた。ただの部屋ではない。きちんとベッドやテーブル、椅子などが置いてあり、しかもそれらは高級感が漂っている。絹のようなすべらかな糸で織られた布団。掛け布団には、所々真紅の薔薇の模様が入っている。テーブルと椅子は、どうやら壁のレンガと同じ物質で出来ているようだ。よく磨かれており、これにも真紅の薔薇の模様が施されている。

小窓から見える空は、すでに闇に染まろうとしていた。思ったより時間が経っていたようだ。

王子は急に疲れを感じ、ベッドに倒れ込んでしまった。

揺らぐ光が目をくすぐる。王子は目を覚ました。

先程は気が付かなかったが、天井には小さなシャンデリアがあり、それにいつの間にか灯がともっていた。

何か食べ物の匂い——振り向くと、テーブルに料理が置いてある。近付いてみると、ライスプディング、ローストチキンなどなかなか豪華なものであつた。しかもまだ湯気が出ている。散歩に出たきり何も口にしていない王子は、空腹に勝てずそれらの料理に手を伸ばした——。

最上階（後書き）

誰か御感想を…！

あと、こんな話、キャラが好きです、というのを教えてください！
参考にして次回作にいかします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8819y/>

塔の上には

2011年12月24日00時47分発行